

廣田律子 提出 学位申請論文

「中国民間祭祀芸能の研究」 審査要旨

論文の内容と要旨

廣田律子氏提出の論文『中国民間祭祀芸能の研究』は、現在の中国西南部の各地域・民族に見られる儺戲を中心とする民間祭祀芸能に関する研究である。この論文の特質は、長期間にわたり中国での現地調査を繰り返し、独自に撮影した映像の分析と、その地域の民族に記録され残されている文字文献の収集により得られた資料の分析により、民間の祭祀と芸能の関わりを詳細に説いていることにある。また、これらの分析を通して日本の民間芸能との比較研究がなされていることにある。さらに、これらの資料を分析するにあたり、折口信夫の理論を用いて

いることにある。

本論文は序論・本論・結論と資料編によるもので、その構成は、序論「第一章 歌と芸能―儺戯と民間芸能」(第一節 折口論と民間芸能、第二節 儺戯の芸能における意義)、第二章 儺戯に唱えられる詞章―中国江南の事例」(第一節 江西省南豊県石郵村の事例、第二節 江西省万載県潭埠郷池溪村の事例、第三節 湖南省新化県洋溪鎮官渡村の事例、第四節 浙江省麗水市の事例、第五節 本研究の目的と方法―日本との対比の試み)、第一部「鬼と翁―折口理論からの考察」第一章「鬼と翁」(第一節 来訪する鬼と翁、第二節 中国の祭りと仮面劇)、第二章「中国の翁」(第一節 貴州省イ族の『ツオタイチー』に登場するアープーモ・アーターモ、第二節 湖南省トウチャ族の『マオグウス』に登場する族祖、第三節 貴州省コーラオ族の『儺堂戯』に登場する土地神、第四節 江西省漢族の『儺戯』に登場する儺公・儺母、第五節 江西省漢族の『儺戯』に登場する土地神)、第三章 中国と日本の翁の語り」(第一章 翁のうたう歌資料、

第二節 日本の翁の語り)、「第四章 中国の鬼神と日本の善鬼」(第一節 中国の鬼、第二節 日本と中国の鬼の語り)、第二部「將軍と神兵」、第一章 將軍と神兵について」(第一節 軍記物の武将、第二節 御神体として祀られる將軍、第三節 神兵を招く儀礼)、第二章 狷神と祭祀」(第一節 先行研究の調査報告に見出す五狷、第二節 祭祀儀礼の調査を通じて得た五狷の事例、第三節 狷神を巡る祭祀芸能の成立)、第三部「少数民族の祭祀芸能」、第一章 中国湖南省新寧県ヤオ(瑤)族『盤王節』祭祀」(第一節 『盤王節』祭祀の生態、第二節 祭場と登場する仮面、第三節 祭祀芸能の内容、第四節 基本となる祭祀的要素、第五節 『盤王節』を巡る神々と伝承)、第二章 中国湖南省ヤオ族儀礼の道教的性格―湖南省藍山県馮家実施の還家願儀礼」(第一節 還家願儀礼の祭祀システム、第二節 祭祀儀礼の内容、第三節 タイ北部のミエン・ヤオ族との関連、第四節 宗教文献の道教的影響、第五節 神像の道教的影響、第六節 還家願儀礼における発生と展開)、第三章 盤古神と神事芸能―日本における展

開」(第一節 神事芸能を中心とする盤古の足跡、第二節 日本の諸文献に見える盤古神、第三節 荒ぶる神々を読み解く)、第四部「女神を語る芸能と語り手―聞き手としての女性の位置」、第一章 女神陳靖姑を語る芸能」(第一節 鼓詞のテキスト、第二節 鼓詞と『海遊記』、第三節 『西遊記』との比較)、第二章 説唱芸能『陳十四夫人伝』に描かれた地獄巡り―血の池地獄考」(第一節 『陳十四夫人伝』の地獄巡り、第二節 『南遊』の地獄巡り、第三節 血に対する不浄観、第四節 女性と語り、第五節 目連救母と女性救済、第六節 語りの中の血の池地獄、第七節 絵画に描かれた血の池地獄、第八節 血の池地獄に見える女性の位置)、結論であり、これに資料が加えられている。

序論は本論文の主旨と方法および目的を論じるもので、その主旨は中国の民間祭祀芸能の研究にあり、その中でも注目される儺戯という祭祀芸能を明らかにすることであるとする。その解析の方法としては折口信夫の理論を当該研究に応用させ、具体的な事例を折口理論に重ねることによって実証的な確証を得ることにあると

する。いわば、中国の民間に多く見られる儺戯を中心とする民間祭祀芸能の事例をフィールド調査により収集し、その解析方法として折口理論を援用し、それを通して中国民間芸能の生態を理論化しようというのが目的である。

第一部の「鬼と翁―折口理論からの考察」は、折口理論の核となる「まれびと」論から中国江南地方の儺戯に來訪する招福神である鬼や翁の解明を行っている。特に鬼と翁が登場して唱える台詞や歌と日本の鬼や翁との比較を通して、ここに東アジア圏の祭祀芸能のあり方と鬼や翁が果たす役割について論じる。この鬼や翁が風貌を異にしながらも、言葉や所作の意図するところに同質の内容が伺えることを明らかにする。仮面の造形に注目すると、鬼面は恐ろしさを表し、突き出た目は呪眼を意味し、邪悪なもの正体を見極める力を持ち、その呪眼により邪悪なものは退散し、そこを祓い浄める役割を担うのであるという。また、翁面は歳を重ねた柔和な老体を表すことで、人々の種々の祈りを叶え福を招く役割を担うのだという。この二者の外見から見ると、鬼は除災、翁は招福という相反す

る役割を果たしながらも、その詞章を分析すると、いずれも幸福の象徴としての宝物や豊作を保証する内容が伺え、そこから見ると鬼と翁はもともと同じ性格を持つのではないかと推測する。それは祖先が子孫の元へと来訪する姿であり、その目的は子孫に幸福をもたらす点において一致し、このような性格は日本の事例からも見出され、鬼と翁という来訪神の問題は、東アジアの文化圏においてさらに検討されるべきであるという。

第二部の「將軍と神兵」は、戦いのプロである武將が中国の祭祀芸能に登場することの意味と役割とについて考察する。武將は祭祀芸能において大きな役割を果たす存在であるが、それらが邪悪なものと戦い排除する役割を果たすこと、その武將たちは地方色豊かな者たちであり、彼らは過去に戦いにより傷つき非業の死を遂げた人物たちであることから、強い怨念を持つとされ、このような武將を祭祀に登場させてその魂を鎮めると同時に、恐ろしく威力のある武將を味方につけようとする目論見が見られるのだという。その上で、こうした中国の武將の事

例を通して日本の幸若舞や將軍舞との比較が可能になるという。この將軍神は關羽のような実在の人物や哪吒のような戦記物語の主人公の他に、地域に根ざし人々に信仰されている將軍神が多く、仮面を着けた様相は、悪霊を睨む呪眼を持ち、様々な武器を手にして登場し、その存在は鬼や翁と並ぶものであり、祭祀に欠かせない存在であるという。いわば災いを及ぼす悪霊を退散させるにはそれと戦い退治し駆逐してくれる戦いのプロが求められたということであり、それが將軍神であり多くの神兵であったのだとする。一方、現実的には中国においては絶え間なく戦いの繰り返し返された歴史があり、人々はそうした戦争の災いを祓い浄めてくれる適任者を求めたのであり、それが將軍神であり多くの神兵であったのである。また、戦争で命を失った將兵たちが陰界（死後の世界）に入っても、陰界の將兵として邪悪なものと戦う役割を担わされているという。むしろ、傷ついて不幸な死を遂げた將兵の霊は、却って強力な威力を持つのだと信じられ、それを人々は利用するのだという。さらにこの陰界の將兵たちは陰界の戦いでも傷つき敗れる

ことがあると考えられたことから、将兵の補給が常に必要であったとされ、そのために祭祀が必要であったという。何よりも宗教者としての資格は、陰界の将兵を手に入れ彼らを使役することにあることから、祭祀においては招兵儀礼が頻りに行われ、そこに招集される代表的な将兵が猖神であるという。この猖神は、東西南北中の方位に結びつけられた荒ぶる将兵の代表で、江西省・安徽省・四川省・湖南省の漢族とヤオ族・コーラオ族の事例を通して、祭祀儀礼に見られる猖神の風貌、所作、台詞、詞章の呪文、猖神図などを確認して分析し、またそれを日本の將軍神との比較検討を行い、比較研究の可能性について論じている。

第三部の「少数民族の祭祀芸能」は、湖南省に住む過山系ヤオ族に伝承されている祭祀芸能を取り上げ、そこに漢族の影響を読み取りながら、宗教文献（経典）および文字資料を通して唱えられる神話・伝承の内容、手訣、呪的歩行、呪符、舞踏といった身体的表現などを検討する。その方法として折口論が援用され、その目的としては漢族の祭祀芸能を基準とすることで、周辺民族や日本など

に見られる祭祀芸能との関係およびその差異を計ることにあるという。漢族の影響下にある周辺民族の中でも、漢字テキストを用いて祭祀を行うのがヤオ族であるが、湖南省に住む過山系ヤオ族の「盤王節」、藍山県の「還家願儀礼」を事例として取り上げ、そこに祀られる神々、祭場の設営、神画、仮面、詞章に見える神々の素性、神話要素、使用テキスト、文書などを分析することで、そこに抽出される道教的要素を洗い出す。さらに宗教者となるための法術の学修と伝授法、七言により伝承される詞章などから芸能の発生に関する問題を提起する。これらを分析することにより漢族的な影響と考えられていた創世神話に見られる盤古に対して、ヤオ族の民族的始祖である龍犬槃瓠と生業神である盤王の伝承に注目し、ヤオ族固有の豊かな神話世界の存在することを明らかにする。また、祭祀に見える呪術性の強い内容についても漢族や他の地域のヤオ族あるいは周辺民族との比較を行い、そこに見られる普遍性と固有性を提起する。

第四部の「女神を語る芸能と語り手―聞き手としての女性の位置」は、祭祀芸

能を元としながらも語り物の演劇性が強まり、特に都市性と芸術性が顕著となった專業芸能者による事例として中国沿海部漢族の女神信仰を背景とする語り物を取り上げる。特に日本においても唱導文学に見られる地獄巡りの血の池地獄に焦点をあてて、女性の生活と信仰の問題を提起する。その女神信仰の中でも「陳靖姑」を語る芸能は多様であり、ストーリーも複雑に構成されていて、演劇性や娯楽性が加わり都市的な要求に応える内容が強まっているところに特徴が見られるが、その場合も女神を祀る祭祀が執り行われ、女神のために芸能が奉納されることが求められている。事例として「鼓詞」「唱南游」「唱龍船」が取り上げられ、そのテキストの翻訳と内容の分析が行われている。その分析に当たり、すでに文学テキストとして成立している『海遊記』と『西遊記』とをもって比較対象としてその特質を明らかにしている。なかでも血の池地獄巡りについては、女性への教化が認められることを仮定し、社会に生きる女性たちがこのような芸能をどのように受け止め理解したのかを問題とする。血に対する不浄観がベースとなって

いるところから、血の池地獄の形成および発展を宝巻・目連救母の資料とも関わらせて、社会におかれた女性たちの立場を論じている。

論文審査の結果の要旨

廣田律子氏は、長く中国民間祭祀芸能の現地調査に携わり、すでに『中国漢民族の仮面劇』、『中国少数民族の仮面劇』（いずれも編著）、『鬼の来た道』（単著）などの成果を公表している。これらは本論文で扱う儺戲研究の序章である。

本論文は、除災招福を目的とする中国の儺戲という祭祀芸能（神祭り・詞章・歌・パフォーマンス）を主な研究対象とするものである。中国の儺戲は漢族や少数民族に広く見られる民間祭祀芸能であり、中国において芸能研究の重要なテーマである。廣田氏も民間祭祀芸能の中でもその中核をなす儺戲研究に注目し、特に江西省で長い間現地調査を行い、その実態の解明に取り組んで来た。そうした

現地調査による方法は、現地に残された資料を蒐集する一方で、現地の儺戯を詳細に録画し、それを文字テキスト化して記録し研究対象としていることである。儺戯を執り行う祭師の伝承する文字テキストが存在する場合もあり、そこでは自らの作成した文字テキストとを織り交ぜながら、現地の祭祀芸能の実態を立体的に組み立てるという方法が取られている。

このようにして蒐集された文字テキストについて、本論文ではその解析方法として折口学の「翁」や「まれびと」などの理論を援用しているところに特質がある。本論文の序論において廣田氏は「江南中国の民間祭祀芸能を分析するにあたり、折口の芸能研究を踏まえ、その論を中国の事例に展開する可能性を探る試みを行いたい」という。このことは、中国の儺戯を折口理論で解析することのみではなく、個別のテキストを越えて、芸能の形成される普遍的な様相を折口学を援用することでより効果的に説明できるのではないかということであり、逆に捉えるならば折口学を実証可能な理論として証明できるのではないかという提起であ

る。

本論文の方法は、およそ以上の二点にある。その上で本論文がどのような成果を得ているか、いくつかの論文から確認してみたい。たとえば、第一部「鬼と翁―折口理論からの考察」は、中国江南地方の貴州・湖南・江西などに住むイ・コ―ラオ・トウチャ・漢などの民族に見られる、儺戯に來訪する代表的な除災招福の神である鬼や翁の解釈を試みたものである。この鬼と翁による問答の台詞やフシをつけた歌を分析しながら、仮面に見る鬼の風貌は恐ろしく、翁は柔和であるが、鬼は除災を翁は招福の役割を持ち、子孫のもとに訪れて幸いをもたらすことにおいて鬼と翁とが性質を等しくすると指摘する。この指摘は極めて注目されるものである。この鬼と翁の芸能からは、折口が三信遠（三河・信濃・遠江）の花祭りや雪祭りに登場する鬼と翁の芸能を調査し、折口の「翁の発生」の論が誕生した。本論文ではこの確認のために西浦の田楽と坂部の冬祭り、あるいは奥三河の花祭りを取り上げて、それを先に見た中国の儺戯との比較を行い、ここに登場

する神は祖先神として村に訪れ、人々の繁栄や長寿あるいは子孫繁栄を言祝ぐ存在であり、そこには両者に共通する要素が強く見られるという。鬼と翁の芸能が日中において呼応していること、その解釈は折口の説く説明によって可能であることを明らかにしている。

また、第三部「少数民族の祭祀芸能」は、本論文において最も特徴を示すものである。「少数民族の祭祀芸能」の論は、漢族の影響下にある湖南省の過山系ヤオ族に見える「盤王節」祭祀と芸能の形成過程を論じるものである。ここでは、漢族神話の盤古神話とヤオ族神話の龍犬槃瓠、および生業神としての盤王の神話が見られ、また、日本の神事芸能に見られる盤古神についても取り上げて、その比較研究を行っている。いわば、漢族神話が周辺民族地域にどのように受け入れられ、独自に展開を示すこととなったのかを明らかにするのがここでの目的である。ヤオ族の盤王節は、二〇〇四年に五十六年ぶりに開かれた祭りであり、その詳細を記録し祭祀次第等の全体像を明らかにする作業から始まっている。そのよ

うな中から神を呼び出す「設壇請聖」の儀式に見える詞章をテキスト化し、その分析を行う。そこに呼び出されるのは、悪神、五猖神、盤古、伏羲、神農、風伯、雨師、竜王、星君、菩薩、紫微大帝、ヤオ族始祖、土地神などの神々であり、そこには漢族の祭る道教の神や仏教の仏も組み込まれることで、その偉大な力を借りて「開天殺」（宗教職能者が神通力を誇示する呪術）を成功させるのだという。さらにこの祭壇に祭られる人類の始祖である南山小妹と東山老爺との婚姻の歌が唱われることで神婚が再現され、神話世界が今を説明する起源神話として成立しているとす。ここに見えるのは、祭祀における神勸請の具体的な方法、祭祀の一連の次第、歌われることで再現される人類始祖の神話、今を生きている民族としてのアイデンティティなど、多くの要素が認められるのであり、そこからは漢族の祭祀芸能をも取り込んだ実体的様相と、口承により伝承されている声のテキストの重層化の問題が浮き彫りにされている。

ここに取り上げたのは、本論文の一部に過ぎない。他の論文においても、重要

な指摘がいくつも見られる。しかし、何よりも儼戯による祭祀芸能研究は、このような現地の祭祀芸能を調査し、そこから文字のテキストを作り、分析を行うということが無い限り、断片的な文字資料に頼らざるを得ないのが現状である。それらを乗り越えるのは、祭師の口頭による詞章の収集により得られた情報を元として、自らの手でテキストを作ること以外には無い。今日、中国国内では祭祀芸能が消えていく状況があり、ここに集められた資料は貴重である。本論文は、そのような姿勢により得られた成果である。もちろん、それらのテキストの解読にはまだ残された課題は多い。そうした課題を解くにも、さらに文字として伝承するテキストと非文字のテキストとの差異、あるいは折口理論のさらなる有効性などの検討も必要であろう。

しかしながら、本論文は中国民間祭祀芸能の研究に大きな貢献を果たすに違いない。それとともに、東アジアの祭祀芸能研究にも新たな道筋を示すものと思われる。一つはフィールド調査の重要性について、一つは調査に基づいたテキスト

分析について、一つは祭祀芸能の理論的位置づけについてであり、今後、この方面の研究に計り知れない影響を与えるものとして評価される。よって、本論文の提出者である廣田律子氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十四年十一月二十八日

主査	國學院大學教授	辰巳正明	印
副査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	新谷尚紀	印
副査	國學院大學教授	渡邊欣雄	印